

「桜井弥六の石像を福島県で発見する」

江戸時代末期、黒埴町から福島県に流れ落ちていった家族がいた。家族の子供は成長し、その地に尽くし銅像が建てられた。などという話を信じられますか。信じてください。事実です。本町の郷土史家宮田栄門さんが発見し、確かめました。

銅像があるのは福島県須賀川市。銅像は昭和5年に建立されました。

今号では、宮田栄門さんにお願ひし、この銅像（現在は石像）にまつわる色々なエピソードを発表してもらいます。



右上/ 桜井弥六の石像
右下/ 戦争で供出される銅像、胸に日の丸の旗を巻いています



左上/ 桜井弥六（前列左）と後藤新平
左下/ 宮田栄門さん

昭和 57年 6月 1日

「銅像はなぜ建ったか」

須賀川 訪問記

桜井岩修さんの話

期待と疑惑



▲先日亡くなられた桜井岩修さん

厳しい寒気もやゆるみ始めた三月のある日、私（宮田）は興野の桜井岩修さんを訪ねた。昨年（二・三）月ごろ大野町の今昔の取材に同家を訪れて以来、約一年ぶりのことである。桜井さんは今年八十八歳の高齢で、多少身体に不自由さを感じられたが、顔色はよく目も耳もしっかりしていた。

私の顔を見ると、ほほをほころばせてにこやかに迎えられ、私の訪問の意図は、話さなくてももう承知しているような顔をされていた。

私は桜井さんに「きびじさい」や金巻の御半田のことなどを聞いた。その後「これは私の他に一、二の者しか知らないだろう」と話始められた。この話が今回の「発見」のきっかけとなったのである。

この時の話は――江戸時代末期、金巻村（現黒埴町興野）に桜井伝兵衛という人がいた。伝兵衛はある事情により、妻子とともに故郷を捨て会津領内須賀川宿に流れて行った。伝兵衛に

は弥六という子がおり、この桜井弥六が明治、大正、昭和の三代、須賀川のために尽くし銅像が建てられているはずである。――というものであった。

さらに、桜井さんは証述として丁寧に表装された銅像の除幕式の趣意書案内状を見せられた。案内状には昭和五年とある。五十年以上も前である。

残念なことに、桜井さん自身もその銅像を実際に見たわけではなかった。にわかには信じがたい話である。話しても信じてもらえなかったという。だが、もし事実とするならば町史として大発見である。黒埴の歴史を解明するためにも大きな手がかりとなるものと考えられた。

※1 昨年発行された宮田さんの本。町内の書店で販売中。

※2 これらについては次号から連載予定の「黒埴町の今昔」で取りあげる予定です。

上の須賀川訪問記と下の桜井弥六伝は宮田さんが書かれたものです。写真や補足説明は編集部です。

銅像建立の趣意書



聞き書き

「偉人桜井弥六伝」

金巻村から須賀川へ

旅立ち

徳川時代の黒埴村は、小さくつかの村々に別れていた。黒鳥村、北場村、木場村、木場村受、板井村。この五カ村は村上藩五万石の領地であった。また、寺地村、立仏村、鳥原村、小平方村、鳥原新田村の五カ村は新発田藩五万石の領地であった。

そして、金巻村（大野、興野を含む）を支配していたのは、新発田藩の分家、池の端藩溝口家五千石である。

この金巻村に桜井弥六が生まれたのは天保九年（一八三八年）徳川時代の末期である。

金巻村はたび重なる水害に悩まされていた。毎年のように中の口川ははんらんし、もともと堤防に近いため被害は甚大であった。また、隣村の木場、板井を支配する村上藩や、寺地、立仏などの新発田藩と違い、池の端藩は弱小藩である。これらの水害復旧に対する援助も微々たるものであった。

弥六、十二歳の嘉永三年（一八一〇年）またも中の口の堤防は

破れた。早急に復旧作業が始まった。金巻村村民総出で、責任者は弥六の父、桜井伝兵衛である。

作業は困難であった。すべて人力だから当然である。そして池の端藩から監督に来ていた一人の侍と村人の中で意見の食い違いが起こった。ついには刃傷事件にまで発展した。（詳細は不明）普請の責任者伝兵衛がその責めを負わなければならないことがあった。

そこで、伝兵衛は村に迷惑を及ぼしてはと行念寺に事情を話し、妻と一子弥六とともに会津へと旅立った。

歩き続けていく日めか、会津領津川を過ぎ会津坂下（ばんげ）にたどり着いた。ここで妻や弥六が疲労で動けなくなってしまう。一カ月も滞在することになった。しまいには、路銀を使い果し桜井家伝来の刀大小を売り払ってしまった。

注、ここまでは先程亡くなられた桜井岩修さんが若いころ叔父の桜井弥六から直接聞いた話である。